英語科編１０

第１１０号
平成２１年１１月１５日

１６　東京外語大から

上條　辰蔵　長野県出身　東外大３４卒
在職４１～４２　東高師教授・外語大教授

上條については詳細が分かりません。ただ、外国語学校の助教授から附属中の教官になったようです。その後、東高師・外語大などの教授を勤めました。

１７　音声学の権威・附属中出身者

神保　格　東京出身東大４１卒在職４１～
大１１　附属中卒　東高師教授

東京神田神保町といえば、世界に類例のない古本屋が集中する街として誇れる地域だと思います。その名誉ある「神保町」の名前の起源は、江戸時代の旗本の神保氏の居宅に由来します。その神保氏の子孫が、神保格で、後に、東京高等師範学校教授として、「音声学」や「言語」に関する研究の日本の権威となった人物です。そして、表題にも記したように、彼は附属中学の第１０回卒業生であるので、なぜ彼が英語に興味を持つようになったのか、その時の教官は英語をどのように教えたのか、そして、彼自身教官時代どのような授業したのか、等々のことを附属中学の記念誌などで語っていますので、神保自身のことと、附属中学の英語の様子がよくわかります。

まず、彼が附属中学に入学したのは明治２９年の４月で、その時初めて英語を習ったようです。以前の号にも書きましたが、附属小学校では英語をすでに行なっていたので、中学からの「外部生」である神保にとっては、初めて習う「横文字」は、珍しくもあり、また難しかったと言っています。その彼に、入学早々英語を教えたのは矢田部良吉で、すでに彼は当時世界的に名を成した植物学者で、英語にも堪能でした。その矢田部が授業で使用した教科書は、これまた、著名な学者の外山正一が編纂した『文部省正則英語読本』でした。それは、当時理想的な教科書でしたが、神保は英語ができず、次のように授業のようすを書いています。「しかし、誠に相済まぬ次第であるが、当時の子供心にはそんなエライ先生がそんな理想的な教科書を使って教えられたのかどうか、少しも分からなかった。」しかし、矢田部は「分かっても分からなくてもお構いなしに、ぐんぐん進まれるので、到底追いつかず、第1学期末の試験にはとうとう英語「梢可」という評語を頂戴してしまった。梢可というのは、１００満点の中６０点以下の落第点に相当する評語である。家に帰っては父に叱られ自分も大いに悲観したが、その年の夏休み中かかって第1学期の分を復習し、第2学期にはやっとで及第点までこぎ着けたのであった。何しろ第2学期の終りには『正則読本』の第2巻の終りに近い所まで進んだのだから、かなりのｓｐｅｅｄをもって走ったわけである。」

そのような授業を受けていた神保が、英語に興味を持ったのは、３学期の授業で、「Ｔｈｅ ｈｏｒｓｅｓ ｗｅｎｔ ｖｅｒｙ ｆａｓｔ ａｎｄ ｗｅｒｅ ｓｏｏｎ ｔｈｅｒｅ という「地の文」が出て来た。これが非常に珍しく思われたのである。当時日本語の書物にはまだまだ言文一致の文が行なわれていなかったので、会話の所は口語体であるが、地の文は必ず文語体に決まっていた。こういう日本語に馴らされてきた頭で英語を習って、地の文が会話と全く同じ文句で書いてあるのに始めて出会って、面白いとも奇妙とも言い様のない一種の感に打たれた」のでした。

中学2年になると、岸本能武太に教わり、

「岸本先生は一層発音のやかましい先生であった。読本の教授法は普通の訳読法で、一々日本語で説明されるものであったが、実に懇切丁寧で隅から隅までよく意味がわかり且つ文の心持までもよく味わうことが出来、ここに始めて英語というものは面白いものであると思ったのである。そして、文章の意味がよく分かった後、音読の練習に移る。それが上に言った通り非常に発音をやかましく正される。その中殊に力を注がれたのはａｃｃｅｎｔである。その教え方は有名なる「首振り法」である。ａｃｃｅｎｔの強い所を発音する時は頭を後ろに傾けるくらいに上を向く、弱い所は頭を前へ垂れてうなずく形をする。」「級全体がｃｈｏｒｕｓで練習する時は2、３０人の頭が上下するので頗る奇観であった。」

このような英語を習った神保は、明治３４年に東京高等師範に入学しますが、当時の教授は、上田敏、本田増次郎、平田禿木、佐伯好郎、岸本能武太、そして、外国人教師として、スイフト、レオナルドらが教えていました。そのころ、神保は「大英語会」などにも参加し、ますます英語に磨きを掛けました。

「しかし、英語を専門にしようとは思わなかった。中学時代に漢文の白文を習いました。返り点もカナもついていないのを下読みして来いといわれて、漢文は不思議な言葉だと思った。言葉というものに興味を持つようになったのは、英語と漢文のおかげです。高等師範を出て東大に入りましたが、言語学というのがあるので、言語学をやりました。」「私の同級は俳人の荻原井泉水、言語学者ですよ。」と、自身の英語・言語学への道を述べています。（『桐陰』、『英語青年』、『ある英文教室の１００年』より。ただし、この号の神保の言葉は、そのほとんどが『ある英文教室の１００年』からの孫引きです）

東大を卒業した神保は、卒業と同時に附属中の教官となりますが、中学生に英語を教えながら、一方では言語学の研究にも打ち込み、途中、英国へ留学し、映画「マイフェア・レディ」のヒギンズ教授のモデルとなったスウィート教授などに師事しました。帰国後は、東京文理大教授として勤め、「古代英語演習」や「言語学概論」などの講座を担当しました。さらに、始まったばかりのラジオ放送、ＮＨＫアナウンサーのアクセント指導などにもあたりました。

昭和２０年、大学を退官しましたが、日本音声学会会長なども勤めました。なお、東京経済大学教授で西洋史の神保規一（３８回）は長男です。神保格著『国語音声学』明治図書大正１４

神保格著『言語理論』神保格先生喜寿記念出版会昭和３６

種目		回数	時間(分)
報道	時報	2	4
	天気予報	2	10
	ニュース	2	30
	経済市況	8	70
	日用品物価	1	15
		計	129
教養	料理献立	1	10
	家庭講座	1	20
	英語講座	1	40
	修養講座、科学講座、名士講演	1	30
	子供の時間	1	30
	趣味講座	1	30
		計	160
娯楽	音楽・演芸数種	計	125
		合計	414

※ 初期の平日の放送時間量（1925年末、東京放送局）日本ラヂオ協会「ラヂオの日本」大正15年1月号より。「英語講座」が最も大きな事組だったことがわかる。

右の表は、１９２５年の平日の放送時間量。英語講座が最も大きな時間であったことがわかる。